

一九七七年一月二〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポラ幅ヶ谷九〇四 電話(03)3337714 6649

FAX(03)32299153 67

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 東京労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

歴史的激動期、時代はどう動く(一) 2

醒めた雰囲気、職場と本部のかいり拡大 3

——政治より「合理化」に議論集中——自治労大会——

鳩山新党に「動揺と日和見」の社民・労組 6

ルイさんとルイズ・ミシエル 9

国労がJR七社に紛争解決・労使正常化申し入れ 12

資料 紛争の全面解決と労使関係正常化の申し入れ(国労、八、三〇)

不当な解雇を撤回し、四名の原職復帰を 13

——「京コン闘争支援全国代表者会議」開く——

寅さん 楽しい映画をたくさんありがとう 14

書評 『人はなぜ闘うか』(横浜人活事件の記録) 15

読者からのおたより 15 編集部だより 16

「社会通信」本誌の読者をご紹介ください

旬刊 社会通信

NO. 648

一九九六年九月二一日号

一九九六年九月二一日発行
(毎月一日・二一日・二二日三回発行)

■巻頭言■

歴史的激動期、時代はどう動く(一)

歴史的転換期 現代が歴史的激動期、「大変革」の時代であることは誰もが語っているようにみえる。だが現代の特徴は、子細に検討しなくても大騒ぎしている連中が、すべて権力者とその茶坊主でもあることだ。これは、過去の歴史—フランス大革命、ロシア革命、第二次世界大戦終了時—とくらべれば異常だ。年表そして歴史の教科書、あるいは歴史小説は時代の変化とともに大衆が動き出し、大変革の嵐が吹きすさぶかように描いているからだ。これは、大変革が起こった時期を起点に歴史が時代区分されることを示すのかもしれない。「小さな事件」がやがて「大事件」となることは、歴史の経過のみが、人間に教えるからといえるのだろう。

現代の大激動期の歴史的特徴は、「二十世紀の時代」といわれた社会主義世界体制がアツという間に崩壊し、歴史の「真空地帯」をつくりだしたことにあるといえるのではない。歴史的にフランス大革命は封建貴族と近代ブルジョワ市民、ロシア革命以降はブルジョア階級とプロレタリア階級が対峙した。現在から過去を見下ろせば、相対立する二つの思想—イデオロギーの相克と映るのは、これまた歴史のしからしめるところだ。

マルクス・エンゲルスの科学的社会主義はドイツの社会民主党の発展、さらにはレーニンの活動がフロイド、ニーチェ、フッサールの思想とともに「二十世紀を動かす」思想としたというより、マルクス以上の思想家を生み出すことができなかつた資本主義世界体制が、マルクスの『資本論』に象徴される資本主義経済体制批判へのイデオロギーとしてニーチェを援用せざるをえなかつたことを示しているように思われるからだ。マルクス・エンゲルスの思想の「一時的破産」が、われわれのもつとも大きく、鋭く、苦しい悩みとなる。しかし、現代は「市場経済」との曖昧な表現ではすまないくらいに「グローバル化」(『共産党宣言』がおもしろい)がすすんでいる。二十世紀初頭のレーニンとカウツキーや『金融資本論』、『歴史における個人の役割』の筆者らとのあの生き生きした論争が再現される時にしなければならないのではないか。その中で、科学的社会主義は不死鳥のごとくよみがえる時を迎えると思われる。

転換期の諸相 現代社会の特徴はさきにもたように、歴史的「価値観」が見失われた状況にあることだ。二十世紀の時代の特色は「社会主義対資本主義」の二元論だった。だが、ソ連共産党の変質とゴルバチョフの指導が、「社会主義世界体制」を一挙に突きくずした。だが、当初の「アメリカの時代」も崩壊。現代は「市場経済」という名の歴史的「価値観」なき時代に入った。

とはいっても現代は「資本の論理」が全世界を包摂し、①ムキダシの資本主義、②世界的大競争が支配し、独占的大企業の国境をこえた価値増殖運動が「そのけ、そのけ資本がとおる」の時代に回帰。「市場経済」、資本主義に逆う勢力—キューバ、北朝鮮を先頭にイスラム原理主義等、資本の価値観に与みしない諸国、勢力はG7はむろん、彼らの国際勢力たる国連、世界銀行、IMFから村八分の仕打ちをうける。これが新たな資本主列強による世界支配のかたちである。

(滝野 忠)

醒めた雰囲気、職場と本部の乖離拡大

—政治より「合理化」に論議集中 自治労大会—

自治労の第六五回定期大会は八月二七日―三〇日に広島市で開催されました。

注目されるのは大会のサブスローガン「民主主義の発展をめざし、あたらしい政治勢力の基盤形成を進めよう」に象徴される政治方針、政局に対する具体的な今後の対応と見られました。しかし、時あたかも新党さきがけの分裂騒ぎが大会と平行して進行する事態となり、来賓として出席した村山社会民主党党首・武村新党さきがけ代表の取材に集まったマスコミの記者たちの熱気とは対照的に、代議員の間には、本部が今大会においても「民主主義・リベラルな政治勢力の形成に努力する」との範囲も一歩も出ない見通しであり、政治状況がますます混沌としてきたことから、醒めた雰囲気が漂っていました。

そうした中で芦田連合会長は、「労組と政党との協力関係はそれぞれの構成組織に委ねる。『君は君、我は我、されど仲良く』だ、無理をしてまでの一本化は良くない」と来賓挨拶の中であっさり述べ、「新しい政治勢力については、連合が大枠で一致して支持・協力しうることが重要。そのために自治労は中央・地方の連合のなかで努力する。」という自治労方針とのずれが見られました。

運動方針案は出席代議員九五四名中九一四名の賛成で決定されましたが、政治方針、反行革闘争、賃金闘争などを中心に、従来になくほぼ全県本部から本部の取組み・方針の誤り・不十分さに対する批判が出され、本部自らも、職場と本部の乖離を認めざるを得ない大会となりました。

選挙闘争方針は臨時大会でというが

新党問題に関する本部方針は、「政治への信頼を取り戻し、生き生きとした民主主義を蘇生させていくためには、憲法の基本理念の創造的発展をめざし、勤労者・市民に依拠した新しい政治勢力の形成が急務です。自治労は『新しい党で次の総選挙をたたかう』という国民に公約された社会民主党の方針を支持し、中央・地方の新たな政治勢力の形成の動きとも連携してその基盤形成に努めます。また、政治の側から私たちの求める新しい政治勢力の姿が示された際には、積極的にこれを支え、その発展と前進に必要な役割を担います。」との言葉に集約されます。

代議員からの意見は概ね次の通りです。①総選挙にむけ地方連合内で自治労出身候補を含めた候補者の決定段階に入っている県本部やローカルパーティーを志向する県本部などからは、新党の用途は立たない、本部は現段階でもっと踏み込んで総選挙準備を急ぐべき。②選挙の公約をトップの判断で変えてしまった社民党にも、政治不信増大の責任がある。国民にわかりやすい責任ある政治、憲法の創造的発展をめざすものを。③新党の理念・基本政策が見えない、本部の動きも不鮮明だ、組合員に説明できない。④方針に疑問がある、蓋を開けたら保守党を応援していたということにならないように。

本部からは、連合内三三単産でなるべく早く新党が示せるように努力する。大筋、旧社会党支持グループが一致し、憲法改正ができるような勢力が誕生することのないようにしたい。選挙闘争方針はしかるべき時期に臨時大会で決定するとの答弁がありました。代

議員の納得が得られたとは言えません。また、臨時大会が開かれたとしても一致した対応を決定できる見通しはありません。

この他、住専・消費税率の引上げに反対する立場・運動提起がないことに対する批判は多くの代議員から出され、本部がむきになって答弁するシーンも見られましたが、最後まで「反対する」の言葉は出ませんでした。

「闘いより政策優先」に批判

さらに、「新しい政治勢力」問題よりも意見が集中したのは、賃金制度・職員定数・年休等の権利などに関わる厳しい合理化提案との闘いについてでした。職場で闘う代議員からの次のような意見は悲鳴にも聞こえるものでした。

①「中核市」への指定にあたって自治労は、コストで国と比較する必要があり、民間委託の推進・賃金・職員定数の見直しを、と指示している。市当局は新たな行政改革大綱を策定し、コスト論から市民サービスを切り捨てるのもやむをえないと主張している。本部の認識は甘い。闘争本部を設置してほしい。②勤務時間・週休二日制について自治省の介入がある。反行革闘争を最優先に。③自治体当局に対する「参加・介入・政策対置」の運動では闘えない。事前協議制の確立のため全国闘争を。

この背景には、過去の大会における本部答弁があります。その内容は、「地方分権Ⅱ行政コスト論ではない」「中核市」指定に伴い、特別な合理化は行わない」という回答を自治省から引き出しているというものです。現実には自治体において労使協議が実質的に行えないほどの自治省からの直接指導が自治体に入っていることが明らかになっているわけで、自治省との交渉で本部の任務は果たした、合理化が進むのは各県・市における闘いが弱いからだというこれまでの本部の認識や「政党的政策パンフレット」と間違われるような議案書に見られるように、「闘いより政策優先」の本部の姿勢に対する批判が吹き出したものです。

本部答弁は、自治省による国並み平準化が強要されている。自治省交渉では、労使交渉を尊重し、自治省が関与するなど主張した。今後、対象組合の代表を含めた対策会議を行い、自治省交渉も強化する、というものに終わっています。

業績給につながる「賃金政策」

もうひとつ注目しなければならないのは「賃金政策（案）」です。本部ではこれを今大会で決定することを前提に組織討議に付していたものの、大会前の中央委員会において、地方組織からその方向について「結果として賃金切下げになるのでは」と懸念する意見が出され、引き続き討論することとなったものです。

問題点として指摘しなければならないのは、地方公務員の賃金について「地域民間賃金準拠」「人口一五万人以上の市に人事委員会の設置を検討する」「同一価値労働Ⅱ同一賃金」などの点です。

これまでの地方自治体労働者の賃金決定の最大の要素は「国家公務員賃金準拠」です。これまでの賃金闘争は、全国平均としての国公賃金引上げ額をもとに、これにどれだけ上乘せするかを軸に展開してきました。この結果、現在自治省は「賃金が国より高い」という自治体への「個別指導」を行い、自治体の回答が納得できなければ、自治体に対し

て制裁としての「起債制限」さえ実施しています。

こうした中での「地域民間賃金準拠」は、「賃金自治」（本部）と称して、その自治体の地域の民間賃金をもとに賃上げ額を決定するというもので、全国平均より低い賃金の地域においては、賃下げにつながっていくことは明らかです。また、民間中小においては、その地域の自治体の賃金水準が賃上げの目標となってきたという面もあり、「地域民間賃金準拠」では、官民の賃下げ競争に陥ることになる可能性さえあるのです。

さらに、人事委員会は建て前として労使から独立した機関という立場をとりつつ、労使交渉事項に踏み込み賃金削減・人事制度の改悪等の勧告を行い、当局の先兵としての姿勢をますますつよめている今日、人事委員会の新たな設置は、労使の交渉で賃金表を決定してきたところにとっては後退を強いられることになり、また、地域民間賃金準拠の勧告の結果としての賃下げや制度改悪による賃金合理化の推進に結び付く可能性が大きいのです。

「同一価値労働＝同一賃金」とすべきという考え方は、なにをもって同一価値労働とするかは明確になっておらず、これまでの闘いの基本であった「同一年齢＝同一賃金」を否定するものです。自治省が狙う年功型賃金制度から職責重視の賃金制度への変更にも重なるもので、生涯賃金の切り下げ、組合員間の賃金格差の拡大・競争の激化につながる危険性を含んでいます。

大会では、①権利闘争を含めた春闘の再構築こそ急ぐべきだ。「能力主義・成績主義」による賃金制度が、今年度の人事院勧告で研究職賃金に本格導入された。組合員の団結に大きな影響を与えるものとなる。公務員連絡会は「能力主義・成績主義」の導入に必ずしも反対ではないようだ、②これまでも人事委員会勧告で出されて以降、血の出るような自治体当局との闘いを行ってきたが、勧告前の本部による自治省・人事院への取組がますます重要になってきている、などの意見が出されました。

しかし、来賓として挨拶した公務員連絡会の代表は、民間の賃金が業績給や一時金に傾斜した配分になっている。今年の人事院勧告でも公務員全体の給与体系の見直しが表示され、従来の年功型賃金にメスが入った。これを全く拒否することにならない、と述べているのです。

また、本部は、春闘再構築や権利闘争の具体的スケジュールはないという一方で、働く意欲の出る賃金体系・制度を追求すべきと、代議員の危惧を肯定するような答弁を行っています。

この重要な賃金闘争に関する政策案も、大会で議論せずわずか二〇日後の各県代表者会議で意見を聞き、来年五月の中央委員会で決定すると述べており、課題について大きな問題を含んだ議論を避け、本部案を通していこうとする姿勢が明らかになっています。

なお、一昨年の大会で組織強化の面で議論となったものの、「定期大会は毎年開催するが、基本的運動課題の方針決定は二年ごととし、中間年は運動の交流・総括などの分科会方式などで開催し、方針の補強・修正は行う」ことを決定しており、「来年の大会以降は運動サイクルを二年とする」とも、役員任期も連合に合わせ二年とする」ことになりました。

（宮本 信）

鳩山新党に「動揺と日和見」の社民・労組

最終段階を迎えた「鳩山新党」問題

鳩山新党問題は、さきがけの分裂となって最終段階を迎え、縮小再生産方式で鳩山兄弟党が九月二十二日頃に旗揚げとなるようだ。マス・コミの支援のもと、ずい分長い間騒いだにしては小さい党だわいといったくなる。これが「大山鳴動して鼠一匹」ということなのであろうと納得してはみたものの、第三局をめざすと称する政治家の人達のさきがけ、社民の出処進退の低級さにはあきれてしまう。理念と自らの責任で行動する国会議員の数の少なさが政党政治を墮落させているのである。党としての生命である基本政策・方針の転換、公約の放棄などを支持基盤である勤労者大衆に何の説明もなく進行させ、限りなく権力側にすり寄って行くのである。政治不信の拡大や政党離れは当然のことである。

まず鳩山氏自身の言動からみることにしよう。その前に注意しておかなければならないのは、鳩山由紀夫という人物は、自らの言動に一貫性がなく、朝いつたことを夕べには変更するのはよい方で、普通は昼前にはもう別のことをいう、といわれるぐらいの人であること。したがって「変幻自在」であり、新党の二十二日の旗揚げも確定的とは必ずしもいえない。しかしこれからは、とりあえず十人内外の国会議員と行を共にしなければならぬわけだからそう大きな揺れはできまいと思う。

参加者は多くて三十人

鳩山氏の「武村（村山）排除発言」はその後表面上は取り消しているが、内容的には変化はない。今後も「排除の論理」は継続するものとみられる。もともとリベラル新党派といわれる人達は、社民党内でもさきがけ内でも、さらに連合傘下の大労組幹部も口では立派なことをいうが、極めて思想性では低い。広く政治勢力を結集するといいつながら、実際の行動は当面のささやかなことで意見が違つくと「排除」の立場で行動する。幅広く、現実的といいつながら保守に限りなく近づいて行くのである。鳩山氏の新党が多くて三十の議員、少なければ十数人になりそうなのは、新党の理念の不明確さに加えて幅の狭い思想性を欠く人物が中心だからであろう。鳩山新党の主なメンバーの顔ぶれを見ればわかる。「武村排除」「さきがけの分裂」を鳩山氏にすすめて、自らはさつさと逃げた新進党の船田元氏、社民党系では、旧社会党を「倒産」させた山花貞夫と赤松広隆の両氏、日本新党くずれの海江田万里氏、鳩山氏を大いに扇動しておきながら人気と保身のためには、変わり身の早い菅厚相、いざとなると日和見をきめ込む横路前知事とごつと並べてみると、いずれも将来を展望して日本の政治改革をと信頼できる顔ぶれではない。むしろ自分自身の人気と生き残りに「小心翼翼」として政治的行動をする集団という印象である。

これでは第三局はできない。明らかに新保守主義の立場をとる弟の鳩山邦夫氏が参謀では、参加しようと思つた人でも日和見に廻るであろう。ただ鳩山新党に替わる新党が出来るかと考えてみれば、さきがけ内も社民内も絶望的である。鳩山新党の基本政策に社民党

的なものがかなり出てくれば、どうせ小選挙区制での次の総選挙では勝負がないわけだから、というわけで新党に行く議員と候補者も出てくるのであろう。

問題は、右派大労組がどう動くかであり、さらに横路ローカルパーティ組が参加できるかどうかにかかっている。労働組合にとって最大に困ることは、政党支持がいくつにも別れることである。連合内はすでに社民党、新進党、さきがけと別れ、最近では自民党も企業と一体で労組支持に参入してきている。これに鳩山新党が加わり、そして民主リベラル新党が出来るとなれば、もう完全にお手上げである。(事実上はそうなっているが)。大労組の右派幹部は鳩山新党に一本化したいが、村山社民、さきがけ、横路グループが動かない現在では立場を明確にできないでいる。右派労組の最右翼にいる電機連合の鈴木委員長は「政界再編の大きな目として重視したい。より大きな勢力ができるよう努力してほしい」(二日の代表者会議でのあいさつ)といつて鳩山支持に向かって動き出している。電機連合出身で社民右派・リベラル九六の代表世話人の一人でもある大畠章宏衆院議員には、鳩山氏らに働きかけ社民やさきがけの大部分も入れる新党になるようにと指示している。

動揺する北海道社民党

社民党の動向に大きな影響を与える横路・社民グループの対応はどうか。八月二十九日に、鳩山氏の動きに驚いた社民・道連幹部は横路氏と会談、党内の混乱を静めるために一通の文書を発送(ファクス)した。それは鳩山新党についての横路氏のコメントという形式をとっている。動揺の様子がよくわかる。①めざす新党(横路氏らの)は、自民、新進に対抗しうる第三極の形式であり、できる限り幅広い結集を追求したい。②この新党は、民主・リベラル諸勢力、個人の総結集を図るものであり、個人のものでも兄弟のものでもない。③インターネットに結集するローカルな政治勢力、新党推進労働会議、自治体議員、市民運動の人々と今後ともこの積み重ねを大切にしたい。④幅広い結集を進めていくには排除の論理を取らないのが大原則である。⑤北海道リベラル・ネットは大切にす。政策集団から政治集団へ、そして状況によつては地域政党を展望する。⑥鳩山氏との関係はリベラル新党の大きな結集のため、鳩山さんも含めて大同団結できればと願っている。そのためには理念と政策を国民の前に明示することが必要だ。

横路氏は鳩山氏らの政策立案に参加してできるだけ幅広く結集できるように努力する、のだそうだ。「社民」がいつの間にか「民主」リベラルと変更しており、社会民主主義はいよいよ排除されることになり、第三保守党への道を走ることになる。第三保守党の性格を強くもてば、自民、新進と対抗できるはずはなく、結局新党を名乗っても保守二大政党に収斂されよう。

物真似の基本政策

鳩山氏はマス・コミや自民党周辺から理念がない、政策がないと批判されたので八月十九日(今度のさきがけ分裂前)に「基本政策原案」なるものを発表した。これを見れば政策の大筋はわかる。しかし彼等の言論は、変動するし、公約も守らないから、今度新党の政策として発表するという文章も、どこまで鳩山新党に参加する人達の本音かわからない。

新党の出発のときは、実現しそうな政策を勤労国民寄りに発表する場合が多い。今回は鳩山氏の出した政策を見よう(要旨)。

「官」主導型社会から「民」主導型社会への転換 (イ) 省庁の統廃合や特殊法人の見直しなど、行政改革。(ロ) 大胆な規制撤廃と必要な規制の充実を明確にした経済構造改革(ハ) 政官業の癒着を解体する大胆な公共事業見直し。(ニ) 未来志向型の財政構造への改革。(ホ) 市民と法人の自由な選択と活力が生かされる公平・公正な税制の確立。

— 行政改革は自民党政府のやり方と同じで、結局人べらし合理化となる。さきがけが先頭になってやった政治改革は選挙制度改革に過ぎなかったのではないか。省庁の統廃合もスローガンだけで具体性がない。「民」主導とは財界主導のことになるといふことか。当面一番聞きたいのは「公平・公正な税制」とはどういう税制かということである。消費税に何故反対しないのか。消費税に賛同しながら公平な税は絶対不可能である。鳩山氏は「友愛」というなら国民多数派の働く人達が失業するような資本主義の悪をどうするのか。具体的には旧国鉄の首切りをどうするのかを明確にすべきである。

「政・官」癒着型政治から「政・民」連携型政治への転換 (イ) 政官癒着の族議員政治を脱却。(ロ) 国会を改革し、議員立法を中心に。(ハ) 地方分権を促し、地域での市民参加。(ニ) 内閣制度を見直す。

— かつての革新政党的政策そのものである。問題は、自民党と財界一体の保守勢力と対決する立場に立たなければ、スローガンだけに終わるし、国民にウソを言うことになる。地方分権というよりも地方自治権の確立が重要なのである。財政のかかることを分権されても困る。道州制や市町村のさらなる合併、議員定数の削減などにはどう考えているのかわからない。

人間の尊厳を大切にすなわち福祉改革の実施 (イ) 福祉ビジョンの確立と福祉システムの形成。(ロ) 自己責任と選択を基本に地域福祉の充実。(ハ) 福祉のために財源の確保。

— 具体性なく、「自己責任」などというが自己責任がとれない高齢者をどう介護するのか。自治体に押しつけるのか。

二十一世紀に向けた教育改革の断行 (イ) 画一的な学習指導要領を排し、教育の分権化を進める。(ロ) 教育委員会制度の在り方を見直す。

— 今の教育現場の実態がわかっていない政治家の空文句である。大学の在り方、教科書検定、教職員の労働強化、教育機関全体の民主化など、ほんとうの改革、民主化の先頭に立たない新党にはムリであろう。

世界に開かれた「信頼の外交」政策確立 (イ) アジア地域の信頼醸成に挑戦。(ロ) 日米関係を軸に、地域的安保体制を構築。(ハ) 国連改革。(ニ) 非軍事の国際貢献を目指し、「アジア協力センター」を創設。

— 日米安保堅持など自民党の外交政策と変わっていない。自衛隊の軍縮をどうするのか。沖縄米軍基地の計画的撤去を考えるのか、どうか。(本誌政権研究会)

ルイさんとルイズ・ミシエル

少し前のことになるが、朝日新聞（七月一日付）に載った松下竜一氏の伊藤ルイさんの追悼の記事を読んだ。ルイさんは大杉栄と伊藤野枝の四女として生まれ、両親が殺害されたのち、福岡県の今宿村（当時）に住む野枝の家に引き取られて育った。人殺しの犯罪者である憲兵が愛国者とされ、親を殺された子供が世の中から疎外されるという逆立ちしたあの狂気の時代をこの女性がどのように過ごしたかは察するにあまりある。長じてかの女は、博多人形の彩色職人になった。無政府主義者の子が手工業職人というのはなにかしら平仄が合っているかのようには思われなくてもいいが、ルイさんの晩年の一〇年余は市民運動や講演活動に捧げられていたことである。その死も坦坦としたものだったと、松下氏は報じている。気丈な女性だったことであろう。そしてまた、親がその子の名前として選び、譲り受けた当の女性ルイズ・ミシエルも気丈で、詩心のある根の優しい人だったようである。ただ、諸般の事情から両親の死後かの女を田舎に引き取った祖父母はルイズを改名して留意子とせざるをえなかった。ルイさんと呼ばれたのはそれゆえである。

ルイズ・ミシエルは、一八三〇年ヴロンクルに生まれ、一九〇五年マルセイユで没している。小学校の女教師だったが、一八五一年二月二日のナポレオン三世のクーデタによって生まれた第二帝政と闘い、その瓦解後、パリ・コミューンの戦士として活躍もした。パリ東南のイシ保塁をめぐる政府軍との戦闘でも、市内のモンマルトル地区の市街戦でもかの女は銃をとって闘った。

鎌倉市地区労の事務局長原均氏はルイさんの同市での講演を聞いたことを「社会主義」七月号で報告しているが、そのなかでルイズ・ミシエルなる人物を知ったのは大仏次郎「パリ燃ゆ」によってであるとしている。私もこの本のなかでかの女の活躍ぶりを讀んだ。「パリ燃ゆ」は、「ドレフュス事件」「ブーランジュ将軍の悲劇」「パナマ事件」とともに、大仏次郎のいわゆるフランスもの四部作の一つであるが、その「あとがき」のなかで、これは学術書でなく、文芸作品であるとわざわざことわっている。歴史文学とはなにかというようなややこしい問題にはここではふれまい。だがこの作品は沢山の文献資料、それもパリ・コミューンにかんする通史や研究書はいうまでもなく、当時の新聞、定期刊行物や個人の日記、回想録などの原資料にもとづいている堅牢なものである。横浜の「港の見える丘」公園にある大仏次郎記念館にはこれらの旧蔵書に補充文献をくわえた「フランス第三共和制成立史資料」二千余冊が納められている。また、この時代の政治風刺画のコレクションも揃っている。これらの資料によって裏づけられた事実といふべきものをこの作家の感性と技量をつうじて把握し、書きあらわしたのがこの作品である。むろん作家自身の歴史観がなければ事実を断ち割ったり、それらをつなげたり、評価したりすることはできない。しかし、それが作品の核心ではないことをかれは強調している。「私自身からは決定的な結論を下さず、コミューンについての結論は読者個々におまかせして、私は出きるだけ源譜に忠実に演奏するに止めました。それにこ不満な方は、随意に本を捨てて御退席くださいまし」というのである。そうはいっても、彼がコミューンに好意的であったことは否定すべくもない。

この大部の作品の発端は急進的な共和主義者でコミューンの首領の一人だったシャルル・ドレクリユズの死をもって始まっている。老齢の彼は武器を持たず、ステッキをついてバリケイドに登り、砲煙のなかに姿を消した。その三日後の五月二十八日、パリ東部のペール・ラシェイズ墓地での最後の戦闘を以てコミューンの幕は下りるのである。そして、この本の最後は、コミューンにおけるプロレタリア派の心臓だったオギュスト・ブランキのクレマンソオに宛てた獄中からの書簡で締めくくられている。ブランキ自身はこのたびも闘争に直接には参加できなかった。なぜなら四三年もこの革命家は牢獄にあったか、もしくは官憲の監視下にあつて政治生活の実際から切り離されていたからである。彼はコミューンの十年後に七六歳で没している。

この二人は大仏好みの人である。この人たちの主義主張は異なったし、その死にざまも違つたけれども、正義感をもって、自分の信念のために生涯を捧げたという一点において変わることがなかったからである。それにまともすぎるほど律儀で、そしてまた下積み者の気骨を天下に示したパリの民衆にも、この作家は暖かい眼を注いでいる。

もつともそういうひとたちのことだから、へまもやらかした。普佛戦争におけるナポレオン三世の敗北後に共和制を布告させたのはかれらの圧力によつたのであつたが、その時組閣された「国防政府」なるものの本当の敵がプロイセン軍ではなくて、武装した自分たちのパリであることに彼らは気づかなかつた。だから、一八七一年一月二十八日に休戦協定二月二十六日には仮講和条約が自分たちの知らないうちに結ばれたうえに、三月一日、パリの武装解除の手始めとして、自分たちの拠金で造られたモンマルトルの丘の大砲を政府が取り上げようとしたとき、民衆は本当に憤慨して立ち上がり、それに恐れをなした政府は正規軍を引き連れてあわててパリからヴェルサイユへと逃避し、各市区の民兵からなる国民軍の中央委員会が市庁を占拠して権力を握つたのである。

だが、このとき国民軍は敗走者を急追してヴェルサイユに進撃すべきだつたのである。中央委員会は、そうしないで、自らが暫定の政権であることにこだわら、コミューン評議会の議員選挙が施行されるまで手をこまねいていて、政府に時を稼がせた。ヴェルサイユとパリとのあいだに事実上宣戦が布告されていたというのに、である。経済の面でもそうだつた。コミューンはフランス銀行の戸口の前でうやうやしく立ち止まつて、その金庫に手を触れようとしなかつたのである。もしそうしたら、全ブルジョアジーがコミューンとの和睦を政府に迫るほどの打撃を与えることになつたかも知れなかつたのである。

もともとこの時期に内乱に立ち上がったこと自体が無謀だつた。三十年代に始まつたフランスの産業革命は完了に近かずいてはいたが、工業の主力はまだ小規模企業で、階級としての労働者の組織性や思想性は権力を握りうるほどのものとはとうていいえなかつた。そのうえコミューンの門前にはプロイセン軍に支えられたヴェルサイユ政府があり、その後門には保守的な田舎地主や農民の多くが控えていたからである。事実、コミューンの蜂起はリヨン、マルセイユやツウールズなど幾多の都市に波及したものの、時をおくことなく壊滅してしまい、ヴェルサイユに対峙したパリは全国から孤立していたのである。だからヴェルサイユの正規軍によるパリの攻略は、とくにメースとスタンでプロイセン軍に包囲されていたフランス軍の一部がビスマルクによつて解き放されてからは、時の問題だつたのである。

そのうえルイ・ボナパルト治下にオスマンの手で近代的に改造されたパリは、美しくなり、街路の幅も広くされたが、それは従来のバリケイド戦をいちじるしく困難にもした。なぜなら街路に大砲を導入することがいまや可能となったからである。それだけに五月二一日、ヴェルサイユ軍がパリに侵入してからの八日間にわたるパリの民衆の抵抗はまさに英雄的という言葉そのものだった。それだからまた、圧倒的な優位に立った政府軍の乱暴狼籍は、一八四八年六月のブルジョアの残虐行為すら顔色を失うほどのものだった。老若男女三万の死体の山が築かれ、政府はその処理に困ったという。さらにおびただしい数の捕虜が、その一部は数珠繋ぎにされて、ヴェルサイユに引つ立てられた。勇敢に戦い、疲れ果てていたこれらの敗者たちをたいして、ヴェルサイユの紳士淑女たちがいかにはしたなく振舞ったかは「パリ燃ゆ」のなかに記録されている。

ついで軍法会議である。ここの叙述もこの作品の圧巻の一つである。政府軍が凶行をしでかしたあとのことである。この軍事裁判がどのような雰囲気であったかは想像するにたかない。死刑の宣告を受けたのは二七〇名で、そのうちの二三名が実刑を受けた。この人たちは最後のとき、コミュニケーション万歳を叫んで勇敢に死に臨んだとされる。出廷したルイズ・ミシエルの挙動は単純で、自信に満ち、いかなる興奮も顔色にあらわしていなかったという。罪状の認否を問われて、ルイズは裁判官に答えた。「私が要求するのは、すでに私の兄弟たちが倒れたサトリーの原っぱで御座います。私を社会より切り離さねばならぬ、そうせよと、ただ今お話がありました。そのとおりです……自由の為に鼓動する心臓は、すべて鉛を受ける権利しかないものらしいですから、私はその鉛の自分の分け前を要求します。私を生かしておおきになると、私は休みなく復讐を叫ぶでしょう……そして委員会に御列席の人殺しどもを告発するでしょう」。裁判長は発言を禁止した。

ルイズはいった。「終わりました。あなた方が卑怯者でなかったら、どうぞ、私をお殺しください」

法廷は思い切ったかの女を死刑に処する気力を失ったと、作家は書いている。ルイズは二年間近くオーブリーヴ監獄に幽閉され、それから、南太平洋のニューカレドニアへ島流しにされた。一八八〇年に恩赦で帰国してからも、かの女は労働運動に加わり、一八九〇年からはイギリスに移り、無政府主義者となったというが、その後のことは、私は詳らかにしない。

私は松本氏の寄稿を読んで感ずるところがあり、それで筆をとった。無政府主義の思想は、私とは無縁である。しかし、わが子がルイズのような背筋のびんとした人物に育つことを願う父親の心は理解できる。そしてルイズさんの人生もルイズとおなじく、苦難ものであつたらうが、それに屈することなく見事に生き抜くことによって、親の負託に立派に答えた。二か月余りの短くはあつたが、巨大な足跡を残したパリ・コミュニケーションは民衆が民主主義の形式的なブルジョアの限度を超えて、自分たちの生活を自分たちで律するという実質的な民主主義の方向へと一歩踏み出したとき、ブルジョアジーがいかに凶暴に振る舞うかを示したのであるが、その歴史的な意義についてはべつの機会に譲りたいと思う。

国労がJR七社に紛争解決、正常化申し入れ

国労は八月三〇日、前日の代表者会議の決定を受け、JR七社に「紛争の全面解決と労使関係正常化のための申し入れ」（資料参照）をおこなった。国労は、去る七月の大会で、①本年度中に全面解決をはかる、②解決をはかるため、労使関係改善についての申し入れなど具体的な対応について全国大会を行うことを決定していた。

共同通信が「労組が和解調整へ一円満な労使関係など条件」と報じたのが八月二十八日の夕刊。三〇日のJR各社の反応は①すでに解決済み、②労使関係は正常、③国労の議論を見守り結論というものだが、JR西は、①国労が国鉄改革を事実として承認、②その理念を含め全面承認することを明確化、③当社への協力の具体化等をおこなうことを、テーブルにつく条件にしている。

国労がJR七社に求めた回答日は九月一〇日。この日を前後してさまざまな動きがさらに表面化することになる。なお今後国労は①労相、運輸省への文書要請、②橋本首相への手紙投函行動、③緊急命令を勝ちとる運動強化のため東京地裁への要請をはじめさまざまなレベルでの行動を強化する方針だ。

国鉄闘争から一〇年、「解決のためのテーブルづくり」が始まった。国労組合員、闘争団の仲間たち、そして彼らとともにたたかいつづけた全国の支援し、連帯する仲間が固唾（かたづ）を飲んで見守っている。（編集部）

資料 紛争の全面解決と労使関係正常化のための申し入れ（国労、九六・八・三〇）

国鉄改革から一〇年を迎え、長期債務の処理をはじめ諸課題の解決に向け、関係者間で尽力されております。国鉄労働組合も、貴社及びJR各社と係争中の紛争事件について、節目の年にあたり、全面的な解決を図りたいと考えております。

ご承知のとおり、一昨年、一九九一年間係争してきた「二〇二億円損害賠償請求訴訟」が、国労会館明け渡し訴訟と共に、国鉄清算事業団との間で和解により解決しましたが、その際に国労は、当時の亀井静香運輸大臣に対し、「国鉄が分割・民営化されたことを認める」「健全かつ正常な労使関係の構築に努力する」旨、表明したところであります。

今般、貴社及びJR各社との間のすべての労使紛争を解決するために、臨時中央委員会（一九九六年八月二六日）を開催し、以下の態度を決定したところです。

第一に、国労は、「改革法」に基づいて推移している現状を承認するとともに、基幹鉄道としてのJR各社の発展に寄与する。第二に、国労は、健全かつ正常な労使関係の構築を図る。第三に、不採用および配属事件等、全事件について、和解の方向が明確になれば、直ちに申し立て等の取り下げを行う。

以上の旨を確認しました。つきましては、上記の趣旨にそって、下記により国労との間で速やかに話し合いを開始し、すべての紛争を速やかに解決するよう申し入れます。

記

- 1、国鉄労働組合との間に、不利益・差別などを一切排除した健全かつ正常な労使関係を構築する。
- 2、不採用問題については、現状をふまえ人道上の観点から早急に解決する。
- 3、全事件の解決を図るため、政府に対し労使双方から積極的に要請する。

不当な解雇を撤回し、四名の原職復帰を

—京都コンピュータ学院闘争支援全国代表者会議開く—

不当解雇撤回を求める京都コンピュータ学院労働組合の闘いは七年になろうとしています。京都コンピュータ学院経営者のこの間の労働者いじめ、特に「組合活動はしない」という憲法違反の誓約書を堂々と裁判所に書証として出す人権感覚や「懲戒解雇は不当労働行為だが普通解雇は有効」とした昨年の京都府地労委などの司法・労働委員会の危機的状況は、全国の働く仲間の怒りを呼び、京コン闘争は今や全国の働く仲間の支援を受け、背景資本である「あさひ銀行争議団共闘会議」の結成を含め前進しています。

現在、中労委の強い勧めで和解交渉に入っていますが、学院経営者は、組合つぶしのために四名の組合員全員を職場から追放するという、自分たちの犯した罪を反省するどころか、全くもって厚顔、知性のかけりも感じられない態度をとっています。

私たちは、中労委次期期日の九月二日をにらみ、学院経営者に「この争議の全国的広がり」と「自ら犯した過ちを認め責任ある態度をとらねばならない」ということを知らしめるとともに、闘争勝利に向けた全国的意思統一をはかるため、八月二四日「京コン闘争支援全国代表者会議」を開催、全国三四都道府県一四〇の団体・個人の連名による「不当解雇撤回を闘う京都コンピュータ学院労働組合を支援し争議の勝利をめざす声明」を採択し、闘う決意を新たにしました。

代表者会議は、京コン闘争支援関東共闘会議事務局次長で国労闘争団の田島省三さんが司会。まず、横堀正一関東共闘議長から、「運動が全国代表者会議がもてるまでになったことを確認したい。規制緩和、行政攻撃、三〜五%の失業率は当たり前とする財界、産業界の転換、学校種別を超えた教育再編という状況を見たとき、京コン闘争をゆるがせにできない。京コン闘争をはじめ大倉電気、恵泉寮の闘い、更に国鉄闘争など諸々の闘いが労働運動再生の任務を持っている。確信を持って頑張っていこう」、京コン闘争支援する会谷内口浩二代表からは「昨年の京都府地労委命令を見て、たった四人の京コン闘争が国鉄闘争に匹敵する闘争になってしまったと思った。ここで言われている『無効行為の転換』は以前から京都府地労委で話がでていた。しかし、当時の労働者委員側がそれを出さなかった。今後、労働問題が民法的処理をされる恐れがある。今後とも闘っていこう」とそれぞれ主催者挨拶があり、支援する会久野晶二事務局長から経過報告、関東共闘伊藤繁樹事務局長から「第五波あさひ銀行全国支店要請行動（九・二七〜一〇・四）」等の行動提起を受け討論に入りました。

徳島県では解雇撤回を闘う森住丸善の石本さんや東京清掃労組の矢鳥組織部長、大鵬薬品労組の北野委員長、新宿地区労の岩崎議長、岩金労組の井出窪委員長、長谷川亘の出身校である早稲田大学の方、また、京都の私学教職員組合からも発言をいただきました。全ての参加者、参加者に発言してもらった時間がなかったのが残念です。

学院経営者は不当な解雇を撤回し、四名を原職復帰させ、謝罪するのが当然です。私たちは勝利まで闘い続けていきます。今後ともご支援よろしくお願い致します。（吉田）

寅さん 楽しい映画をたくさん ありがとう

——自動改札!? だんだん風情がなくなるね——

東京の下町、葛飾は柴又「車寅次郎」、人呼んで、フーテンの寅さん、この役に扮する俳優の「渥美清」さんの死が、八月四日に公表された。この日から、映画「男はつらいよ」の舞台となった葛飾柴又は、連日別れを告げる、多くのファンが訪れ大変混雑をしている。京成電鉄でも、亡き寅さんを偲んで「ありがとう寅さん」と銘打って、寅さんの似顔絵をヘッドマークに冠した列車を八月二三―二五日まで運転したり、寅さんの映画歴代ポスター四八枚を柴又駅に掲出するなどして、寅さんの業績を偲んだ。この間、通常の柴又駅の利用客の数倍にあたる人出が毎日あり、多い日は正月並の多客であり、臨時応援の人員をはりつけ対処している。

寅さんの役の渥美さんや、妹の「さくら」役の倍償さんなども、撮影の合間に、柴又駅の中で休憩する、こうした時、いろいろと話をしてくれたが渥美さんは「おとなしく、優しい話しぶりで、トツトツと話しをするようなタイプの人だった」。また、駅員が、柴又駅も「自動改札機になってしまふんですよ」と言うと、「だんだん風情がなくなってしまうね」という返事が、今でも妙に心に残っている。

柴又の駅員さんと話してみた。なぜこんなに沢山の人が毎日来るのですかねえ、と質問すると、彼曰く「ウーン、アレですよ」という、「アレ」って何ですかと聴くと、「反抗のアレですよ」、反抗「アレ」って何のことですか、と聴くと、資本主義的蓄積が進むと、一方で反抗の増大も進む「アレ」ですよ、その「アレ」の表れの一つですよ、とのことでした。これにはたまげました。寅さんが死ぬと「アレ」が表れるのです。なるほど、そういう見方もあるのかと思った。そう言われてみると、世の中、このかた、日本の経営の徹底で、人の心は冷えきり、人を蹴落とす競争が支配している中で、映画の中の柴又、この一角には、まだ下町の人情、横社会の郷愁が残っている。毎日顔を付き合わせていたらたまらないが、たまに帰ってくる変わり者の寅さんなら受け入れる町がある、団子屋がある。寅さんのような人は、今の世の中、管理が徹底している社会では、変人、厄介者扱いされ、うまく生きて行けないが、あの映画の中では、変わり者の寅さんも、町ぐるみで心配し、何でも話し合える、民主主義の香りのようなものがまだ残っている。現代社会の色にそまらない人間も包み込んで生きて行かれる。

本来、社会とはそういうもので、十人十色、いろいろな人がいて、いろいろな意見を共用し、いろいろな個性がぶつかりあって、独創性や、新しいものができて行く土壌が作られるのであろう。あの映画には「恋」と、日本のふるさとの美しい「風景」とともに、人間社会のあり方にたいする問題提起も含まれていたのではないか。体制的合理化は、まずまず、そうしたものを壊し、人の心を凍らせる。そうした現代社会だからこそ、これに抗する寅の生き様に共鳴する人が多いのではなからうか。

むずかしい理屈はともかく、いずれにしても、寅さんファンがこんなにもたくさんいるこの社会を、これ以上住みずらくするわけにはいかぬ、労働者諸君、共にガンバロウ。

寅さん、ありがとう。さよなら、安らかに、お眠りください。

(鈴木 賢二)

「書評 人はなぜ闘うのか」(岡田 尚、国労横浜人活弁護士、原告団、教育資料出版会)

権力犯罪を、権力側が認めた

国労・横浜人活解雇事件で、仲間たちは何もしていないのに妻や子供たちの前で、犯罪者として手錠をかけられ逮捕され、解雇された。裁判の課程で国鉄は暴行の証拠として暴行現場の録音テープを提出した。だが、専門家(大学教授や映画監督)が分析したら、合成して作られたものと分かり、更に、そのテープの裏面には、国鉄当局と警察が、暴行事件をデッチ上げるための相談が録音されていた。

それを最初に発見したのが「殺された」坂本弁護士。それだけでない、犯罪がないのに逮捕して申し訳ないと、金銭で補償する判決「被疑者補償判決」も出、権力犯罪を、権力側が認めたが、職場には復帰させない。

私鉄の一九九〇年の定期大会で「車の両輪のような同士である国労の仲間にたいする国家的弾圧は、全労働者への攻撃であり、運動の原点から国労支援の方針を出すべきだ」と、一九九六年三月の、私どもの研究会の調査によると、①国労支援を強め、解雇撤回の緊急行動を三五%、②何としても、不当な解雇撤回をさせたい、二九%、③できたら、解雇撤回をさせたい、二九%、④理解できるが、やむを得ない、七%、と九三%が国労支援を認めている。

民間の組合の場合は相手は一企業だが、国労の場合は相手は国家権力。政治家というのは、行政の荒波の中を漂う椰子の実にすぎない。行政とは、労働者・市民のためには、ではなく「資本」の収奪の組織にすぎない。①政治とは何だ。(金融)資本が人民を支配する手段。②いじめとは何だ。支配と被支配の縦の構造。③分割民営化の目的は何だ。膨大な国鉄の含み試算を金融資本が収奪すること。

「人は、なぜ闘うのか」。闘いの中で人間は変化する。正義が、社会の悪を裁くのに限界はない。仲間たちの変化は社会を変える。国労の闘いは運動の牙城、革命への核かもしれない。(哲)

※お申し込みは国労横浜支部教宣部まで

電話 〇四五(五八二)六五二一 FAX 〇四五(五八二)六五二二

◇読者からのおたより◇

政治は末期症状、新社会党への期待 橋本連立政権は住専、消費税率アップ、大震災被災者の切り捨てと悪政のしたい放題。社民党やさきがけは限りなく自民に近づき、野党ぶる新進党は自民党と同様、企業利益のために規制緩和を目論み、党内では宗教団体による支配も進んでいます。日本の政治は末期症状です。一人ひとりが主権者であり、その幸福のために政府とか国家を作っているにすぎません。その政府が悪政のし放題なら取って替えるのが民主主義です。新社会党はそのための政党だと考えています。(大阪・山下けいき) 編集部より 政治家諸氏に信念がありません。「鳩山新党」しかりです。鳩山邦夫氏はまさに日和見主義のカタマリです。ウソのない政治めぞうよ。

米軍日出生台移転・演習反対に抗議 政府・防衛施設庁は八月二日、日米合同委員会の事務レベル会議で、沖縄米軍実弾演習を日出生台など五演習場に持ち回りで移転することを確認した。政府は、八月中旬をめどに公式に勧告案をまとめ、合同委員会での合意を得た

いとされている。また、日米合同演習についても八月二日、その大要が発表され、着々と準備が進められているし、日出生台の恒常的米軍基地化につながりかねない動きになっている。私たちは政府・防衛施設庁に対して抗議の声を集中し、米軍基地・演習の縮小整理による解決を求めていきたい。

(福岡・J)

編集部より 権力の弱い環は①沖縄・安保、②もんじゅ・巻、③国鉄闘争です。この三つが政治の流れを変えます。下からの運動をさらに大きくしましょうよ。

一部拡大できた！ 昨日、「社会通信」をコピーして一年間ほど読んでくれた人が、購読すると言ってくれました。社民党支持の見直し、新社会党への期待を持ち、連合運動への疑問とセンター運動の意義・存続に努力されています。

(鹿児島・N)

編集部より 一年も努力してくださったんですか。しかもコピーまでして。心から感謝の言葉を言ってくれました。さきの原稿はそれで、ワープロ第一号です。フロッピーに「保存」したはずが、新しい原稿にとりかかったとき、「消去」——誤って——してしまいました。何事も最初は難しいようです。

(神奈川・O)

編集部より ワープロ第一号の原稿ありがとうございました。先生がパソコンに挑戦されるとは。私どもも負けてはられません。楽しく競争いたしましょうよ。

自治労大会に行ってきました 誌代おくれすみません。集金はほぼ終了段階にあるのですが、もう少しです。八月二十五日から三十一日の間、自治労大会の用務で広島に行きます。送金、もう少し待ってください。

(自治労・F)

編集部より たくさんの部数おとり扱いいただき、感謝にたえません。自治労大会の感想などを寄せていただければ嬉しい。

明るく楽しく運動 岡山の地ではかって左派と言われた人で、現社民党に残っている人が、私の回りにもけっこういるのですが、いくら考えても社民党が社会主義政党内転化するとは思えず、ただ「流れ解散」を待つのみ状況に他なりません。岡山も八月四日、新社会党岡山県本部が結成されました。八月十八日には「護憲懇談会・岡山」の結成総会が開催されます。ともかく、「明るく楽しく」運動するため新社会党とともに「消費税5%反対、廃止」のたたかいに全力をあげたいと思います。

(岡山・H)

編集部より ご活躍に心から敬意を表します。「楽しく明るく」、いいですね。

一九九六年の話題 一九九六年の話題はいい事も悪い事も〃〃〃(オウ)〃のつく話ばかり。O157、オリンピック、オウム裁判、沖縄米軍事基地問題。年内に話題になるのは岡崎ひろみだ。もちろん「新社会党岡崎ひろみ・三度目の当選！」である。

(『ひろみ通信』)

◇ 編集部だより ◇

▽巻町につづき、沖縄でも有権者の過半数が「基地整理・縮小問う県民投票」に賛成した。地方分権ばやりの昨今、真の自治とは何かを示す画期的出来事だ。

▽東京の足立区長選では新社会、共産が推せんする候補が新進・公明、社民・自民の二人の候補を破り当選した。

▽総保守体制への反乱の始まりか。近づいたはじめての小選挙区による総選挙の結果を予知するものになる。橋龍氏はさてどうする。